Anchor's PERSON

株式会社　紀乃屋
代表取締役

中井　誠

ロックバンドの一員として、仲間たちと夢を追って上京した中井社長。
精力的に音楽活動を続けてきたが、30歳を目前にしてそのキャリアに終止符を打つ。
その時、メンバーの一人であった社長の弟と交わした約束がある。
「時が来れば、また手を組もう。音楽ではなく、今度は違うステージで」。
そして、その時は来た。社長はITのスペシャリストとなった弟とタッグを組み、事業を進める。
二人の化学反応が、地域の農業にどんな価値をもたらすか、楽しみでならない。

「『時が来れば、再び手を組もう』。その約束を果たす時が来たのです」

© 2019 HOUDOU-TSUSHINSHA Co.,Ltd.

最先端テクノロジーで切り拓く 地域農業の新たな未来

KINOYA FUTURE is MADE by CREATION

株式会社 紀乃屋

【本社】和歌山県日高郡みなべ町西岩代 1606-7
【東京】東京都豊島区池袋本町 4-46-11-952
URL：http://kinoya.jp

和歌山県日高郡みなべ町を拠点に、梅の最高級ブランドである「紀州南高梅」の加工・販売事業を手掛けている『紀乃屋』。同社の中井社長は、IT や AI などの先端技術を活用し、地域の農業に新たな価値を創造するべく挑戦している。本日は、タレントの板東英二氏がそんな社長に様々なお話を伺った。

――早速ですが、中井社長が事業を立ち上げられるまでの歩みから伺います。

和歌山県の出身です。10 代のころ、音楽に夢中になりましてね。当時はバンドブームの真っ只中。地元で仲間たちとロックバンドを結成し、音楽活動をスタートしました。19 歳のころ、レコード会社に声をかけていただいたことがきっかけで上京することに。CD デビューを果たし、ライブやローカルラジオへの出演など精力的に活動を行っていました。そんな中、大手広告代理店のあるプロデューサーとの出会いが大きなターニングポイントになりましてね。

――ほう。どういうことでしょう。

当時は私たちのバンドの人気が出始めたころで、私自身少し浮足立っていましてね。今振り返ってみれば、自惚れていた自分がいました。そんな時に、襟を正してくれたのがプロデューサーの存在だったのです。その方は、「音楽活動は一つのビジネス」ということを私たちに教えてくれました。社会人の基礎として必要不可欠なビジネスマナーを徹底的に叩き込んで下さったことで、セルフマネジメント力を磨くことができました。この経験こそが、私の経営者としての原点になっていると思いますね。

――なるほど。音楽活動をビジネスと捉えられるようになったことが、今の経営にも活かされていると。その後も音楽活動は続けられて？

20 代後半からは地元・和歌山でも活動するようになりましたが、30 歳を目前にしてすべての音楽活動にピリオドを打ちました。それから実家に戻り、家業に入ることに。実家は農業と漁業の両方を兼ねる「半農半漁」を手掛けており、農業においては、ここ和歌山県日高郡みなべ町が一大産地である「紀州南高梅」の栽培を主軸に据えていたんです。手探りで農業と漁業への挑戦をスタートしましたが、3 年ほど経ったころに、ある壁にぶつかりました。

――と、いいますと？

自然を相手にしなければならない仕事ですから、どうしても収益は不安定になるでしょう。日夜畑や海で作業に没頭しても、その労力に見合うような満足のいく収入は期待できないんです。私は、そんな環境に疑問を抱くようになりました。それで収益力をアップし、所得を向上させるために何ができるのか、自分なりに考えるようになったんです。ただ、農業のやり方自体をいきなり変えるのは周囲の反発が予想される。そんな時に着目したのが、「6 次産業化」です。

――最近よく耳にするようになった言葉ですね。

ええ。6 次産業とは、農業や水産業（第一次産業）の従事者が、加工・ブランド化（第二次産業）を行うことで生産物の価値を高め、流通や販売（第三次産業）を手掛けることで収益を向上させることを指します。このように、“経営の多角化”を図っていく取り組みが 6 次産業化なんです。私共が栽培・加工した南高梅の販売を手掛けるべく、昨年設立したのが『紀乃屋』。立ち上げに際しては、私の弟が力を貸してくれましてね。実は、弟はかつてのバンドメンバーのうちの 1 人だったのですが、バンド解散後も東京に残って独学で IT を学び、大手 IT 企業でキャリアを蓄積していたんです。そしてマザーズ上場企業で取締役という地位を捨てて、当社の取締役に就いてくれました。彼が培った IT のノウハウを当社で最大限に発揮してもらうことにより、新たな価値が生まれるのではないかと考えています。

――弟さんの存在はとても頼もしいですね！　今後はどのような事業展開をお考えでしょうか。

人口減少、超高齢社会を迎える中で、農業や漁業、林業といった第一次産業、及び第二次産業の担い手、後継者不足が深刻な問題になっています。その救世主として、大きな期待を寄せられているのが、AI やビッグデータや IoT、ロボットなどを活用した「ハイテク化」でしてね。世界一の農業大国であるアメリカでは、すでに一次産業のハイテク化が進んでいるんです。極端に申し上げると、農園に足を運ぶことなく、自宅にいながらスマートフォンやタブレット端末でロボットやドローンを操作して、除草作業を行う――こんなことが可能になります。今後は当社の農園でも人工知能（AI）を活用して、梅の栽培の効率化を図っていきたいと考えていまして。また、第二次産業の加工部門においては、今年から来年にかけて本社のある和歌山県日高郡みなべ町に新工場を建設予定。そちらにも AI やロボティクスを導入し、最少人数で業務を行える体制を構築したい。それにより、人材不足といった課題に対応していきたいですね。その一方で、外国人労働者の積極的な受け入れも進めていく構えです。

――六次産業化の取り組みもさらに進めていくお考えで？

そうですね。私共は農産物を利用した加工商品を、直売所を設けたり百貨店などで販売したりするのではなく、インターネット通販での販売をメインにしていこうと考えています。これまでにない新たな六次産業のかたちを確立することを目指し、弟と共に挑戦していきたいですね！

（2019 年 3 月取材）

紀州のこだわりの味を消費者のもとへ

▼農林水産省の六次産業化「総合化事業計画」の認定を受け、自社農産物を利用した加工商品の販売を手掛けている『紀乃屋』。同社が販売する商品の中でも、厳選した食材を 1 回食べきりサイズにまとめた「紀乃屋プチグルメシリーズ」は、雑誌や TV などのメディアでも取り上げられ、特に人気を集めているという。同シリーズでは、紀州南高梅を伝統の製法で仕上げた蜂蜜梅、紫蘇梅、鰹梅の 3 種を楽しめる「紀州南高梅梅干味比べセット」や、温暖な気候に恵まれた和歌山県が誇るフルーツ蜜柑、桃、柿を贅沢にグラッセに仕上げた「果樹王国和歌山フルーツグラッセセット」、紀州ならではの魚介である鮪、鯨、うつぼを珍味に仕上げた「黒潮の恵み紀伊水道海鮮珍味セット」などをラインナップしている。同社こだわりの味をぜひ一度、試してみてほしい。

板東 英二（タレント）

代々受け継がれてきた農業の伝統を守りながら、IT や AI といった先端の技術を取り入れて新たな農業の仕組みを確立するべく、果敢に挑戦されている中井社長。深刻な人材不足の解消だけでなく、地域の産業を活性化することにもつながるでしょう。ぜひ頑張っていただきたいですね！

© 2019 HOUDOU-TSUSHINSHA Co.,Ltd.